

自らの体験や感じたことを作文で伝える 「県福祉作文コンクール表彰式開催」

去る一月二十一日に、第三十五回神奈川県福祉作文コンクール（共催：県共同募金会、後援：県、県・市町村教育委員会、NHK横浜放送局、神奈川新聞社、テレビ神奈川、日揮社会福祉財団）の表彰式を開催しました。

青木紀美子審査委員長（NHK横浜放送局放送部長）からは、「東日本大震災と福島原子力発電所の事故を受け、幸せや豊かさ、人と人の絆の意味が問われるいま、入選作品に限らず、寄せられた作品、つづられた言葉には一層、胸に迫るものがありました。これが子どもたち自身の成長の糧ともなることを祈ります」と講評をいただきました。

この福祉作文コンクールは、子どもたちに「ともに生きる福祉社会」について考え、学校での生活や日々の暮らしの中で、「思いやり」や「助け合い」の心を育んでほしいと毎年開催しているもので、今回は県内の小・中学校併せて二百四十六校から九千八百八十五編の応募があり、地区審査から県一次審査、県最終審査会を経て、優秀賞十六編、準優秀賞二十編、佳作二十編、合計五十六編が選ばれました。

入選作品の一部を本会ホームページに掲載していることもあり、県外の小学校から「総合教育の教材として生徒に配付したい」、あるラジオ局からは「番組で朗読させてほしい」など、一般の方々も含め、うれしい反響が寄せられています。ここでは本会会長賞（小学生の部）を受賞した新井佑里恵さんの作文を紹介いたします。

（こもしび運動推進担当）



県知事賞「彼女の言葉」を手話で朗読する中川恵美さん（県立平塚ろう学校中学部）。小学生の部は「手をとりあってつくる社会」を内田有咲さん（横浜市立都筑小学校）が受賞し朗読



表彰の様子。写真は優秀賞（中学生の部）で、本会会長賞「福祉について」を受賞した奈良崎実明さん（葉山町立葉山中学校）

優秀賞 神奈川県社会福祉協議会会長賞

みんな違って、みんないい

厚木市立上荻野小学校 六年 新井 佑里恵

私の兄は障がいがあります。たまに大きい声を出したりします。言葉はあまり上手に話せません。でも兄は相手が話している内容はきちんと理解しています。兄の性格はきちょう面で、家の中で物が落ちているとすぐに片づけたり、ドアが開いていたりすると必ず閉めています。最近はずごく家の手伝いをしていて、気が付くとおはしやお皿をきちんと並べています。私が高い所へ上ろうとすると手を引っぱって下ろそうとしたり、わざと反対方向に行くと「こつちだよ。」と手を引いてくれたり、小さいころから私を心配してくれました。お菓子を食べる時も必ず私の分も持つてきてくれる優しい兄です。

私は兄を通じていろいろな障がいのある人と出会う事ができました。多動な子やすぐにパニックを起こしてしまう子、車イスに乗っている子、お話が上手な子、全然しゃべられない子、本当にいろいろな子がいて一人ひとり違います。でもそういう子たちと接して感じてきた事は、私たちとあまり変わらないという事です。

テレビや本の情報だけでは、障がいのある子に対してみんな同じような印象を持ってしまっているのではないかと思います。一人ひとり違うのに、最初に見た子の印象で障がいのある子はみんなそういう子なんだと決めつけて欲しくありません。

私は小さい時から障がいのある子たちと接しているからかもしれないですが、大きい声を出したり、パニックを起こしたりしている子がいても、日常的に見ているからか特に何も感じません。ふだん外出先などで兄が大きい声を出してしまった時、じろじろ見られたり何か小さい声でひそひそ話をされると、すごくいやな気持ちになります。パニックを起こしている子を見ると「あっ、障がい者だ。」などと、障がいのある子に差別するような発言をする人がいます。私はそういう人に障がいの事を少しでも知ってもらい、その考え方やイメージを変えてもらいたいです。金子みすゞさんの詩で「みんな違って、みんないい」という一節がありました。

障がいをもつ個性としてお互いが認めあい、障がいのある子も障がいのない子も一つになれるような社会になればいいなと思います。